



八百七

繪本胡蝶夢

五

特
八達三
960
5止



門遠
號960
卷5

本清

繪本胡蝶夢卷之五

久々追々欲嫁お七を油屋へ奉
於七火を捨けめいと云うるも

油屋武蔵の根籍は苛核痛は多し心
念入り久々寄り家は横冠於七が應否を絶聞と只
顧迫感督責する事酷虐りともハ久々別大小畏

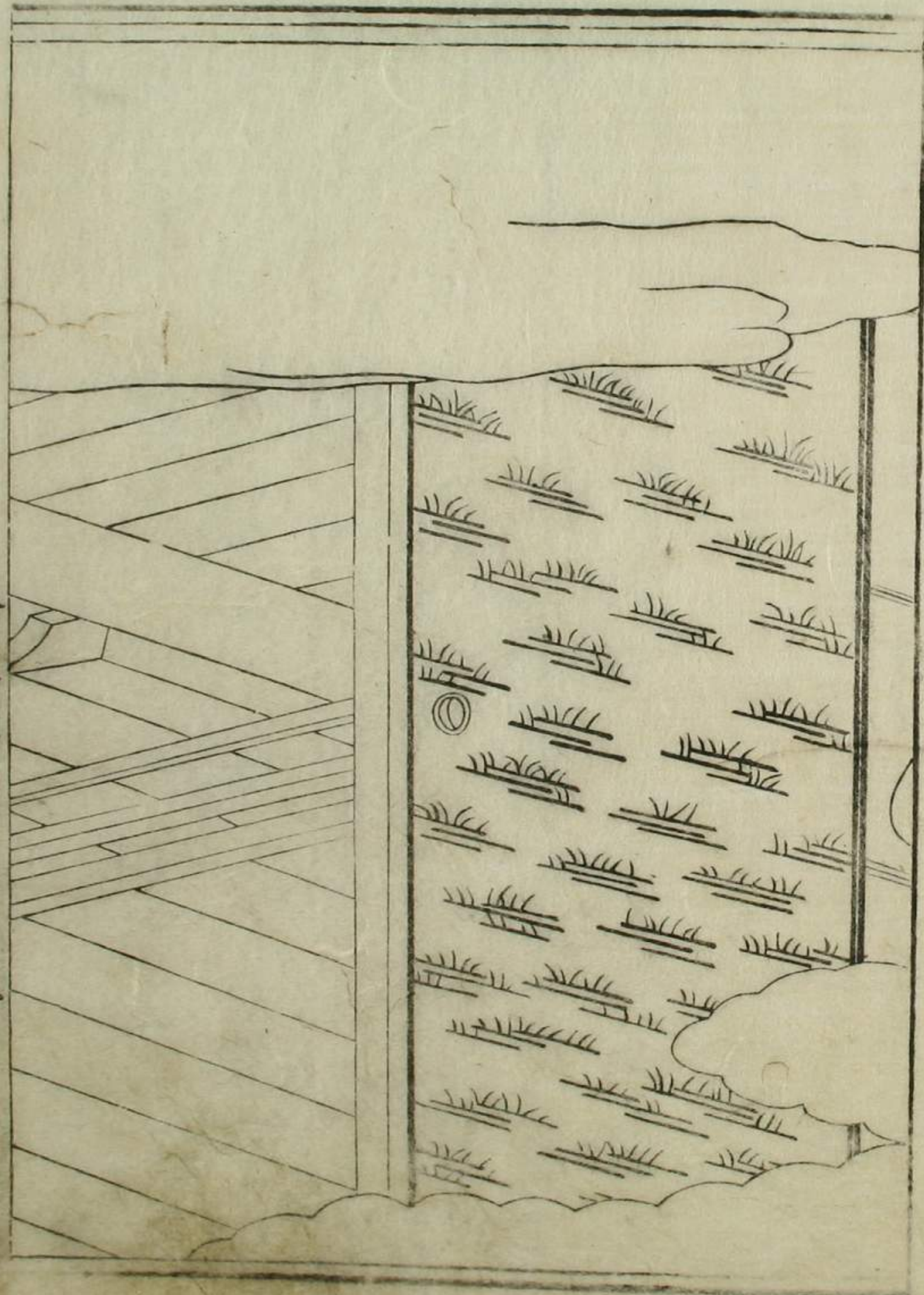
一言言ふ事あるは湖くく道言事
就むる今些一の塵碍けりぬるのり必
まある一戸一里の遠近も漸一里の通

世七
永講
十

卷之五

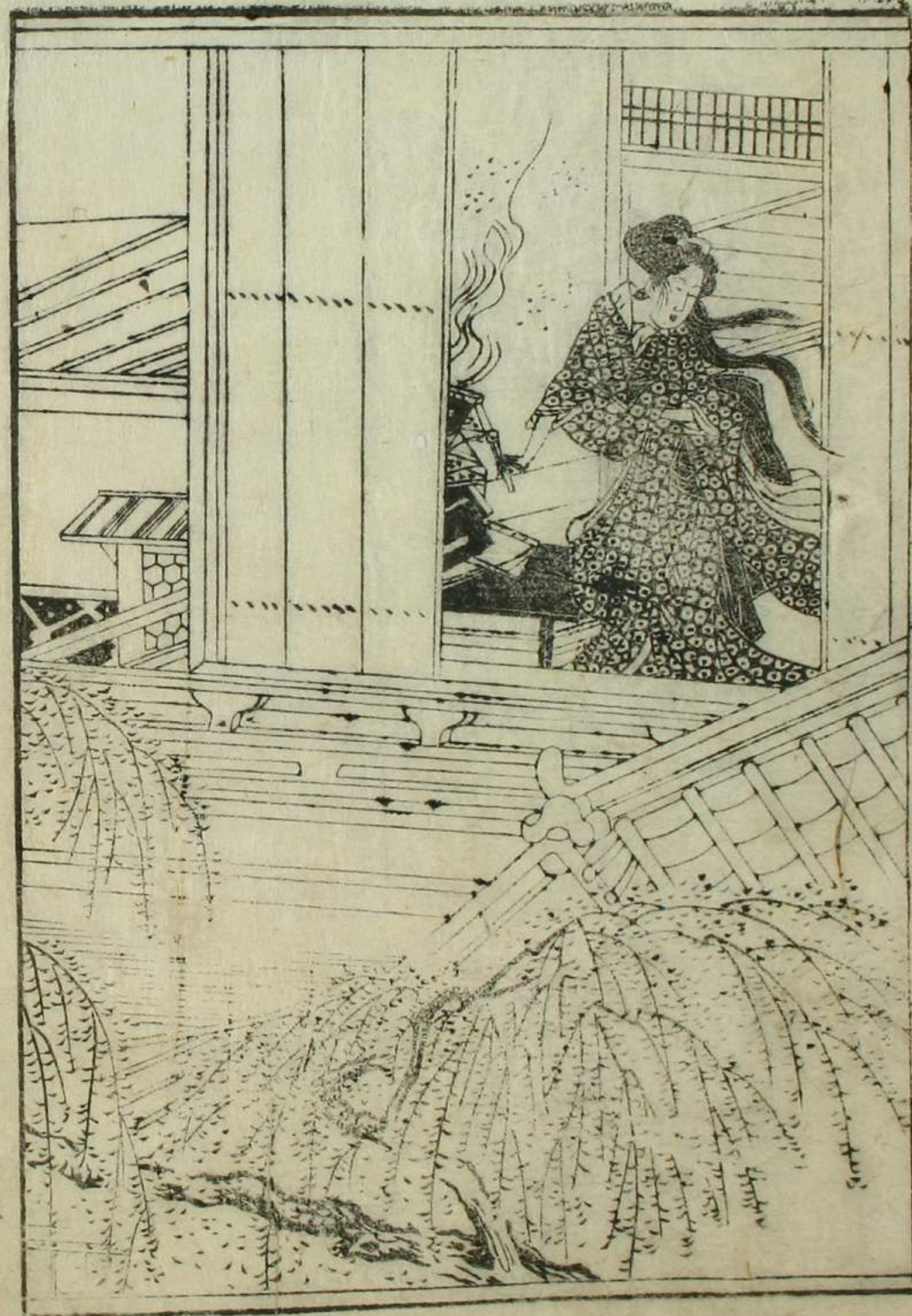
及べり津入る船を渡さば甲斐の變志死事ありしを
 角性急あらしむ事の防礙めり娘毒あを尸腐米
 應否をアへーと武をふをいらく透し宿をく帰ら
 しめりとも今さら終んべ死年終もかく所全忘を
 麼もああのー妻娘小憑を見人をもと二人を二階へ
 誘ひ素衣をい索河内の産を十之廿時げあへ丁僕
 奉公に本り初々の思を流り年歴る小應く内外
 の事ハがも小任やも流るハ久たを心の流跡もと
 此小流りし小厚恩丈さへ有る小東道丈を()とのあり

ありぬ山大痛濱死の時の枕下より象袋を遺
 らす小流り怖あや自らの妻をぶ本の残れ小
 娶偶べーと小盆中てりささー有るさ象袋
 小徹了丈りしと象袋をもち一粒一錢も跡ハ
 ち手手足拘搭拮梧とも秋風落葉は其本も
 消へ用るさーと氷の秋りこく甚麼しては有
 の人小使り雨雨の惠もゆぐやとおの取小油や
 武をまが於七を嫁は欲しとて若干の美令を
 出ー尚まて變火の其後も這家普請もはて



とく二階をぬり久きおハ胸をさす親子の別
 あくすも己が郎入るふりおあも父あも
 竊と忍びか狂情胸を両手小捧へ
 へしゆり明日小迫ら這血意しれ
 と相氣のこしく血を脳りさす
 甘火の思案修羅の巻や急流二階
 の子紙小蠟燭の火を刺黠せ
 其位禰すまうの格又燭おま
 火も事せと表の騒動久きおハ
 けり轉倒表のま

趕ある拙遠へく武まおハ鬼入
 大膽不敵の女身犯罪をき
 捲着もハ其も小鬻着咬傷るを
 お七りさる其つじし武まおも
 の大勢が趕入りく防爐おそ
 老主保趕せり久きおハ
 作は這王後出丁おハさ
 お七はあかふさりハ



卷之五

志ろも事あらずまきくはれ火事お小おまへ
 落り通の
 その中不憐愛ある小遊の深て
 一とあめ甲斐
 もあくをらあまの悔つと事
 枝くゆめを
 せふ
 今と度とあち人
 方小遊
 とそなの火印
 西
 お教が

春顔あきく
 の涙
 辺集人入
 跪り
 状の娘
 娘
 即
 二階の回

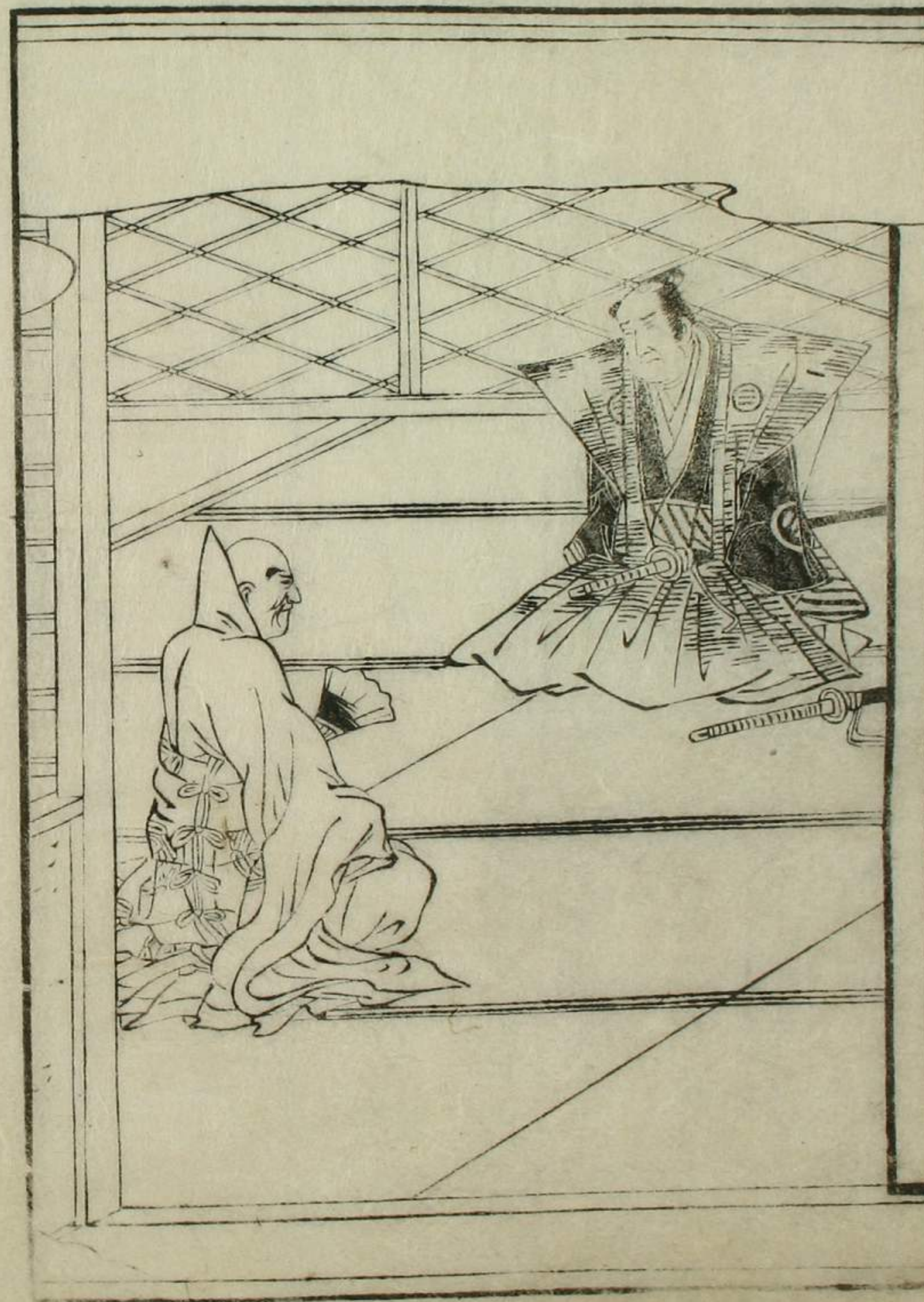
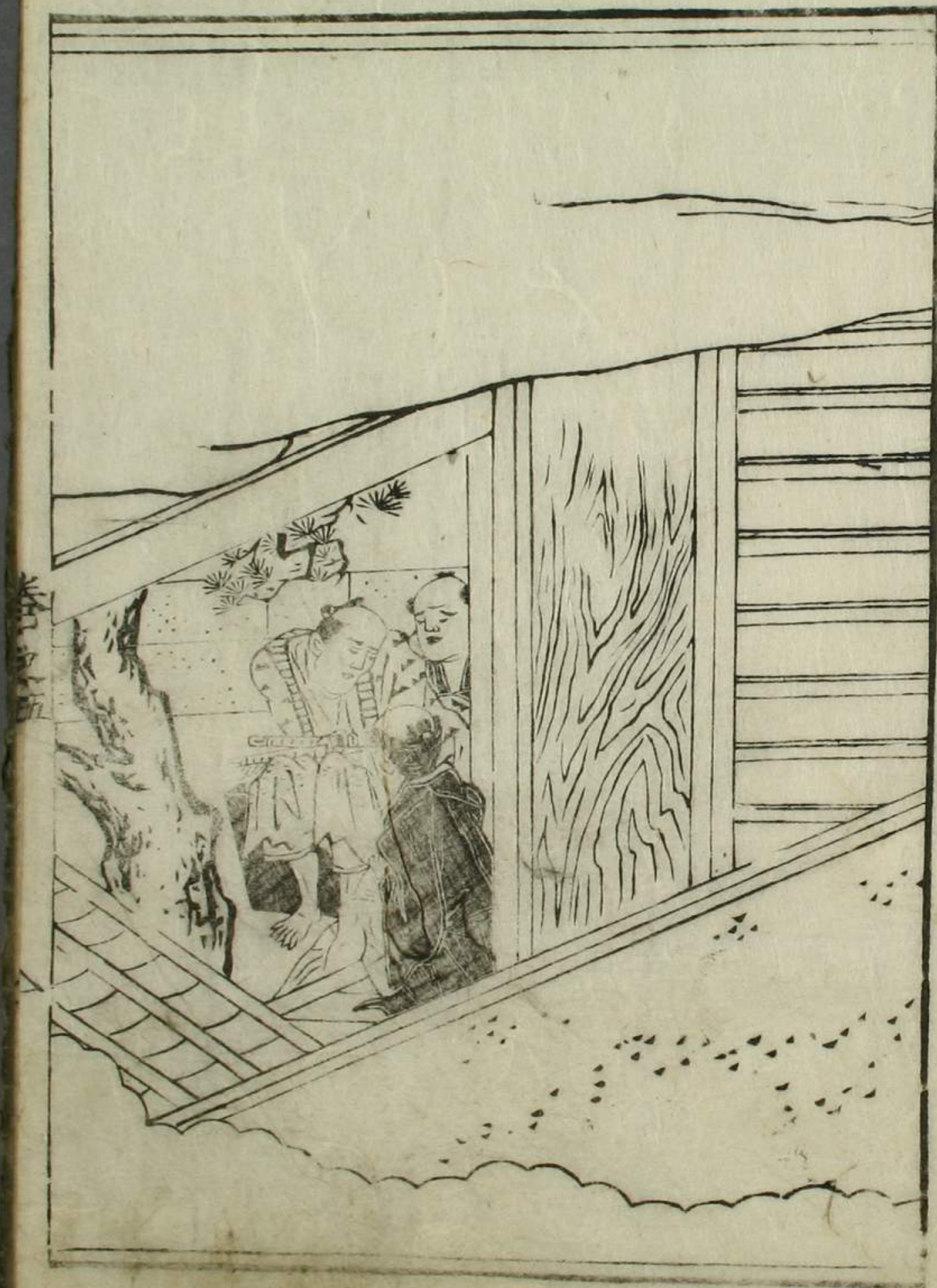


卷之五

日拳上人於七が助命願ひの徳
上人胡練の愛して悟道を以て修め

吉祥院日拳上人ハ八百屋お老の助命の爲小日毎
涙を集人の書へ来り種々小放のをおもとも王法
の或も驚り脱けしといひんげし今日ハ萬葉一詩の
場所を合小かてを七故人をのと普留那の辯
舌を煉り一向小免許の事をおもとも
集人一巻領来あくと上人おむつといふ丈釋氏不
佛法あり政事小ハ又五法何り今上人のお七を救

能を棄て乞ひ給ふ人を助る慈悲善根某一とて
怎は疎急あつらんや付交前後の差別あき小娘子
見ろ小不便ハ某とてと上人小燈々々も甚低ヤ人甚
夜武多傍が諛訥といつ又鎌倉中ハ巡按の巡街私
小罪をかるめ賄賂を以てりかとも風評何りてハ
赤役職の碍耳か守君への不忠以爲おせんさもハ天
下の王法ハ是れもあはれ事と思へるよ志あり
今ハ應主官ハハ此處きまも何しとハ夫を爲さ小侍
有へ上人の大慈悲心あとも感念はからんやと



種くあて免くかへりりり
歌盡出尋那可得三千世
界本毎六躬日峯上人ハ寥々
寺小唄り権者
智識の此のうへを定る業ハ是
非由也し猶も愛ハ
鬼子母神と燈明をのくさ
照らし狂音言く聲ホ
あゝ今朝の勤りよ夜も
初更小唄りし
以悦惚とまゝく夢とも
風く一雙の蝶花菫の通り
優知として飛交ふ風
往了還了粉々
顔之
頰之左小麻あひ右小うむ背せに綢繆ハ
縋り別々ハ遠い
を嘗め花を吸の羽翼を撲
鬚を揺し緋く

且戯も且遊べり
そや笑客の影く
を雌雄の小蝶ハ
四翼を収め花の下へ
肌すりあへく宿り
り上人寂くと
赤觀了實や優えん之の
を風蝶ふうてつのるる
小たとみ只且短みき
夏
のはも伉儷いしせの契ちぎり
とあといふ
這箇むつ
り
お七おしちが夢ゆめの危あやうきも
十羅刹じゆらせつ女の救すくひ
は托たく能のうり
小胡ここ
蝶てつの客きやくに變かへり
おん告つげり
あ
冷ひやみりや鳴なり
平へい有あり
佛ぶつの
やと倚より
お
細こく
嬉うれし
さ
能のうる
法ほうの
園えんを
や
見みる
一いつ
蝶てつく
此この
眼まなこの
あ
り
り
小
有あり
は
ら
や
と
障せう子し
を
用もちく
燈とうを
ら
り
て
尋たづね
る
そ
の
か
ら
小
夢ゆめ
小
ハ
あ
り
と



三の襟灯目かけて入人とす這仕落り愕とく夜の
 袖をおろしひ拂と米の復の響一這方ハとと燈を吹
 消るや呀と悲しや向ふは復る佛前の灯の火不飛込て
 翅を感て焼死たり上人の燭を燭と棄定る業ハ佛力
 少そ及さしり以何令衆生得入無上道速成就佛成
 南無妙法蓮華經

附録

八百屋久き流り毒

お七の頭繫ふ細も一日より病積胸小衝逆事三四度

八中不瘡瘰とあせが罪せよ一日より一月ばかりを
 二二系不ニ一く物果るるとあり

安井家の事

安井家を相渡し一後不非業乃死を懐せしとき大不遊
 梳る所と起しを懐母の諫を於て追善
 のこと供を流又菩提の為とて濡佛を
 常去りしとやり東土入口くは有る佛ハ
 お家一して観賞せしと誤りお七ウマのあり
 佛小一とをらしうがお七を追言の為不建せし

といふ言あり

収隸 浄外

おもろ罪業承んるふ志のひざむきしき行度へ赴金取
し日峯上人の弟子とありおもろが菩提を吊ひしり
後 檀林へ入て能化とありしとあり

下婢 お板

おもろ死後よりさうくを真念ひ種々の能心運ありしは
主母おもろ戒名を承ひし負ひ愛くは州より歸りし
しふるまふといふ情愛おもろが相像と違を後似合の

伉儷もあま近記頃まで安井家より目あこかりしとあり

悪僧 禪長

寺を造りしれしころ乞食とありは戸中を掃ひ
徘徊りしとあり

油屋 代惣 妻

相州宮根の下にて薬を昇雲脚仲間より立寄りて
まじりしをんころくつりしとあり

油屋 武 妻

えん系湿瘡の病有りしころへ寺に宿ししとあり

鈴木瀧洲先生著

温書益隨筆

全四冊

此書ハ國字ノ隨筆ニシテ雅俗ノ考証
ヲカ子學問ヲ心カクルニ甚ク益アル
故ニ博物家モ座右ニ置ベキ書ナリ

遊仙屈鈔

唐張文成作
學士伊時鑒
全五冊

此書本邦ニテ中華ノ小説ヲ譯解スルハ
此書ヲ以テ始祖トス 嵯峨天皇ノ時學士
伊時ナルモノ神仙ノ譯ヲ得テコレヲ解ス
トイヘリ小説家必讀ノ書ナリ

忠臣銘々傳

粉色入
全壹冊

此書ハ赤松の義士四十七個徳志の
實徳と譽て画立圖ヲス人の氣流を
激スルモノ也 画手本之最良なる川

加藤在止翁著

太平國恩理談 全五冊

此書ハ赤松の義士四十七個徳志の
實徳と譽て画立圖ヲス人の氣流を
激スルモノ也 画手本之最良なる川
身中の中の一ひを述一人は吾れも此の
徳志之外あり文小書之の自在を以て
人々を感ぜしむる未だ此の士而以て懐
仲の非を痛み及洲の士代著述しそ成刊
以して名を……んとするの概ひはあらば
字に天下國家の幸慶いづとも是小書之
やの……の……書ありハ……
女老婦ともに能い去我今……
儒佛の……を……たの……
ら……小座右を……

造物趣向種

全二冊

此書ハ氏神の氣流他……
……の……
……の……
……の……

同貳編

近刊

對照書札

前後全二冊

星池泰先生書
漢朝人ノ當時應用ノ書牘ヲ和文ノ書
簡ニ翻譯シテハ學向一益ニシテ且ツ
星池氏ノ書ノ尊美ナルヲ嘆賞スヘシ

三教童諭

全四冊

此書ハ……
……の……
……の……
……の……

古今武勇歌仙

壹冊

此書ハ……
……の……
……の……
……の……

